学芸手帖

恐山地獄　肥後和男
ストーン・サークルと青銅刀子　駒井和愛

昭和三十一年一月三十一日国鉄特別扱承認雑誌第三一七八号
昭和二十二年八月二十七日第三種郵便物認可（毎月一回五日発行）
昭和三十三年二月一日印刷
昭和三十三年二月五日発行
第二十二巻　第二号

民間伝承改題

（通巻第二三〇号）

十一・十二・一・二月合併号

定価四十円

昭和三十一年一月三十一日国鉄特別扱承認雑誌第三一七八号
昭和二十二年八月二十七日第三種郵便物認可（毎月一回五日発行）
昭和三十三年二月一日印刷
昭和三十三年二月五日発行
第二十二巻　第二号

Vol.22 No. 2 fet. 1958 (No. 230)
GAKU-GEI-TE-CHO (Minkan-Densho) Edited by the Folklorists' Club of Japan.
C/O Roku-Nin-Sha, 870, Asagaya, Suginami-ku, Tokyo, Japan

東

親切・迅速

資本金
4,400,000,000円
諸準備金
13,200,000,000円

東海銀行

高血圧にはこれ！

マルゴ印
田辺製薬

頭重・耳なり
目まい・不眠
肩こり……

高血圧が進むといろいろな症状を伴いがちですが、これは動脈硬化による血行障碍が原因です。

アドナーSは高血圧を安全に下げ、血管を強くし、動脈硬化を防ぐ…三剤分の作用によりこれ等の不快症状を気持よく除きます。

アドナ・S エス

(ADS32)

30錠 350円・100錠 900円

55C—44

IBM 2639　東京都杉並区阿佐ケ谷1の870　六人社　振替東京115444番　電話(39) 5994番

西王母の歴史

田中克己

長い休みのつれづれに、手もとの本をあけて見る。中に「西遊記」がまじり、子供のころよりも面白がつて読んでいるうちに、以下のことに気がついた。

「西遊記」にもいろいろあるが、手もとの本は百回本で、明の呉承恩の作といわれるものである。その第五回に西王母が出て来る。かいつまんでしるすと、孫悟空（実はまだこの名がついていない時の話だが）は、玉皇大帝の桃園の番人をしているうち、この桃を食えば不死になると知つて、盗んで食う。

そのあと、ある日、西王母が桃の宴をすることになつて、七人の仙女に摘みにゆかせると、赤く熟したのは一つもない。そのうえ孫悟空は、宴会場の瑤池へもまぎれこんで、酒をぬすみ飲む。天上は大騒ぎとなる。けつきよく孫悟空は、これを捕えようとする玉帝の将兵をみな退け、如来によつてはじめてとらえられ五行山におしこめられる。安天大会という宴会があらためて催おされ、西王母は桃を献じ、また仙姫たちに歌舞をさせる、というのである。

「西遊記」はこのあと、空想をほしいままにして、孫悟空を活躍させるのだが、彼のいたずらのはじまりが、西王母と関連しているところから、ふと気がついて、西王母はいつから中国人の心に住みだしたのだろうとしらべる気になつた。そのうちに西王母にも歴史上の発展のあとが見られることに気づいた。以下にそれを書いてみることとする。

「西遊記」のもとは、呉承恩以前からあつた説話であることは、周知のことであるが、この百回本では西王母は呉承恩の時代である明代の女性の姿をそのままに反映して、しとやかではあるが、無活動で、一向に神霊的な要素をあらわしていない。それは百回の他の回にでも出て来るのかと、めくつて見たがどうも出て来ないようである。

しかし呉承恩の「西遊記」のもととなつたという南宋の「大唐三蔵取経詩話」では、西王母はもすこし、しやんとしている。この本は日本にだけ残つたのを、中国で王国維先生が刊行して、いまでは容易に見られるが、百回本西遊記とは、全くちがつている。巻首が欠けているのが残念だが、あつても十七回しかなかつたはずである。

その第十一回は「入王母池之処」と題し、女人国から数百里来て、西王母の池に近ずいたことを、まず孫悟空が三蔵法師に教える。そこで法師が「おまえ行つたことがあるのか」とたずねると、悟空は答える「八百歳の時に、その中へ入つて桃をぬすみ食いしやした。いまで二万七千年間は、来ちやいません。」

そのとき三蔵法師がいう「どうか桃がなつてくれりやいいが、三、四個ぬすみ食いできるからね」――この本の三蔵法師は、呉承恩のとはちよつと性格がちがつているのである。悟空はいつた「あつしは八百歳の時に、十個ぬすみ食いしたので、西王母につかまえられて、左の肋に八百、右の肋に三千の鉄棒をくらい、そのあと花果山紫雲洞に流されやした。いまでも肋骨が痛みやす。ぜつたいぬすみ食いはよういたしやせぬ。」

この話では、如来でなくつて、西王母自身が孫行者をとらえ、罰棒をくらわしている。したがつて必ずしも呉承恩のせいでなくてもいいが、南宋から明末まで三〇〇年くらいの間に、西王母の性格がだいぶ変つて来ているのである。しかしこの変り方は、実はこの期間にはじまつたのではない。

西王母という名詞の出て来る中で、一等古い本は、私の考えでは「爾雅」という字引で、これには「四荒に西王母あり」といい、中国からはなれた野蛮人の住地の名として出ている、と解釈される。この字引は周公の作だというのは、もちろんうそで、漢代に出来たものであろう。注をしたいちばん古い人が劉歆といつて、有名な劉向の子で、漢末の人だからである。もつともこの男は古書を偽作した疑いの多い人物だが、たとえ爾雅がその作としても、漢末の本であることにはまちがいがない。

「淮南子」はどうかという方があろう。この本は題のあらわすように、淮南王の作であるといわれる。これが本当で、その書いたままがいま残つているのなら、淮南王の死んだのが西紀前一二二年であるから、もとより古い。しかしこの本も最も古い注を書いたのが、許慎で、後漢の人である上に、その師の賈逵というのが劉歆の友だちであるので、偽作、改作の疑いが濃い。ともあれこれにも「西王母は流沙の瀕にあり」としるして、地名としてあらわしている。

そんなわけで、前漢一代を通じて、すなわち西紀一世紀ごろまでは、西王母は、桃園のあるじの称ではなかつたのである。

ところが、このたぶん異民族の語から成る地名が、その漢字の宛字のおかげで、ちがつた意味をもつようになつた。

その代表が「山海経」である。この本の西山経の部分には「玉山はこれ西王母の居る所なり。西王母はその状、人の如く、豹尾虎歯にして善く嘯く、蓬髪にして勝を戴く」とあり、怪物ではあるが、地名ではなくなつている。

清の学者畢沅の解釈では、玉山は今の酒泉県（甘粛省）の西七十里の崑崙山のつづきだという。しかし豹の尾をもち虚の歯をもち、と形容されたのでは、たぶん中国人とはかけはなれた野蛮人として考えられたのである。

この「山海経」は晋の郭璞の注がいちばん古いが、これも彼自身の偽作ではないかとの疑いが濃い。もしそうなら、彼の生きた四世紀までに、西王母を人間のたぐいとする改変がおこなわれたのである。

ところで「山海経」では西王母の記載がもう一か所にある。三危の山の記載をして、ここに三種の青い鳥が住んでいるという箇所は、畢沅の解釈ではじめて、いまの敦煌にあつた三危山に住む青い鳥のあるじが、西王母だとわかるのだが、大荒西経の部分ではは つきりと、世界の西端にも王母の山があり、そのふもとの野に三種の青い鳥が住みと、全く重複した記載をし、「大山あり名づけて崑崙といい……その外に炎火の山あり、物を投ずればすなわち燃ゆ。人あり勝を戴き虎歯にして豹尾、穴処す、名づけて西王母といふ」とある。

この記載に対し、畢沅は、西王母は崑崙の

宮のほかに離宮があるので、一箇所にじつと住んではいないのだ、と解釈するが、古書の解釈としては、なんと古書批判のおろそかなことである。この記載は、作者の思いちがいの結果重複したのに相違ない。

しかし西王母はさらに形を変える。「西王母伝」という小説ができるのである。漢の桓麟の作と銘うつが、だれも信じはしない。私の見た明刊本「五朝小説」でも魏晋小説の中にいれられていて、ここでは伊川の生れで侯氏という姓もあり、しかも神力は非常なものである。上古、黄帝と蚩尤の戦いにも、黄帝に味方してこれを勝たせたくらいの力がある。姿は気になつたと見えて、蓬髪や虎歯はその使者である白虎神のすがたであると訂正している。茅盈、王褒、張道陵を教えたことが、しるされているのは、この小説の作が、後漢末の張道陵の宗祖として神格化されたのちであることを証し、漢の武帝と西王母が会つたことは「漢武帝伝」にのせているから、ここにはしるさないとあつて、「漢武内伝」よりのちの作品であることもわかる。周の穆王と西王母との会合も「穆天子伝」にゆずつている。

「穆天子伝」と「漢武内伝」とは、どちらが古いか。私の考えでは、登場人物の古い「穆天子伝」の方が後だと思うが、文体から異論もあろう。前にものべた明刊本「五朝小説」に収めた「穆天子伝」は古本とことわつて、私どもの知つているのとは全くちがい、西王母のことは見えていない。

「漢武内伝」では漢の英雄天子である武帝（岩波新書の吉川幸次郎博士の伝記ですでにご存じのとおり）と西王母との会合をしるすに、英雄にふさわしく彼女を絶世の美人に形容する。二人の腰元をつれて天から下りて来た彼女は年のころ三十ばかりに見え、せいも高からず低からずであつた（ミス・ニッポンとはことなり）。西王母はやがてみずから厨をもうけて、武帝にごちそうするが、食後のデザートに桃が登場する。宝玉の果物皿に七個のせられた桃は、大きさアヒルの卵ほど、その味のよさに、武帝は種子をしまいこむ。

「なにをなさる」ときかれて、「まくのです」と答えると「およしなさいまし、この桃は三千年に一度だけ花咲きみのるのですもの、あなたにとつて、この世ではお役にたちませんよ」といわれて、武帝はすごすごと種子をとり出す。

そのあいだ音楽がかなでられ、最後に年のころ二十ばかりに見える上元夫人が呼ばれる。これが実は西王母と四千年ぶりの対面でたいへんなお婆さんなのだが、武帝にセックスの道の講義をする、とゆきとどいたところは、のちのちまで愛読される理由となつたにちがいない。

これで西王母の大体の構想はでき上つたのである。「西遊記」で七人の仙女が桃を摘みにゆくが、この七という数は「漢武内伝」の七個の桃が、意識的にか無意識でか伝わつているのである。

「漢武内伝」に見えていることでは、まだ東方朔の話がある。東方朔は実在の人物で、武帝に文学で仕えた、ちよつとユーモラスなところのある男だが、やはりこのころできたと思われる「博物誌」にも見えていて、この会見のとき、ものかげからのぞいていると、西王母はめざとく見つけて、武帝にいつた。

「まどからのぞいている子供は、三度もわたしの桃を盗みましたのよ」。これで東方朔が人間でないことがわかつた云々。

周の穆王との関係だけがのこつている。くだくだしいが、ついでにのべると、「穆天子伝」の普通の本では、周の五代目であるこの王は、八頭立の駿馬の馬車に乗つて、領地の外をめぐり、西王母の住む瑤池で宴によばれた。西王母は王のために歌うたい、王もこれに和した。その歌は云々、というのである。

ところで、このことが「列子」にも見えていることは、ご存じの方が多かろう。「列子」は西紀前五世紀ごろ、といえば孔子より一世紀ほどあと、孟子よりは一世紀前に出た列禦寇の著というが、この箇所の文章が全く「穆天子伝」と同じで、「穆天子伝」が「列子」から転載したというよりはむしろ、「列子」の方がこれを取つたと考える方が正しかろう。現在の「列子」が魏晋の成立ということは、このことからも証される。

このように西王母の伝説が定まつた形をなしたあとで出て来て、これを盛んにうたつたのが、神仙を崇拝した唐の詩人李白である。その作中に「西王母」を登場させるのは、私の計算では十六篇。いま残る彼の詩の中では、西王母こそ登場回数がもつとも多い人物（神仙をふくめて）ではないかと思う。李白が、これまで挙げた小説類を愛読したことも証明できて、私はうれしい。なかで有名なのは「清平調詞」の第一で

雲には衣裳をおもひ花には容（かたち）をおもふ
春風おばしまを払つて露華濃（こまや）かなり

もし羣玉の山頭に見るにあらずんば
かならず瑤台の月下に向つて逢はん。

といつて、揚貴妃を西王母、もしくはその侍女にたとえている。

白楽天も西王母伝説は知つていた。その「牡丹芳」ではしかし

仙人の琪樹は白くして色なく
王母の桃花は小にして香（かんば）しからず

と、牡丹をほめるあまり、西王母の桃園の花をいやしめている。しかし西王母と桃との関係が、唐代にゆるがぬものになつたことは知られよう。こうして南宋の「大唐三蔵取経詩話」、明末の「西遊記」へと、西王母の歴史はつづくのである。

蛇足をちよつとつけ加えると、晋代の小説が、西王母の全盛期である。天上天下三界十方の女子の登仙者や得道者は、みなこの下につくと「西王母伝」にもしるしている。女子のみならず、あらゆる神霊鬼怪にもうち勝つことも見えていた。孫悟空などにいじめられるはずはなかつたのである。それが明末になると、ああも力弱くなつたのは、私は一般社会における女性の無力化の反映だと思う。無力化の原因は何か。纏足だろうか。

しかし晋代には女性が男性とほぼ対抗し得たのであろうか。それともたぶん男性であつたろう作家たち——実はただ一人の郭璞なのかもしれないが——がひどくロマンチックな女性観をいだいていたのだろうか。

明末の謝肇淛の「五雑俎」を見ると、明の宮廷には長さ五寸、幅四寸七分の桃の種子が蔵されていて、「漢の西王母の漢武に賜ひし桃」と刻みつけられてあつたという。

清末になつて、中国に珍らしく、女性でありながら権力をふるつた西太后は、宮中のつれづれに劇を催したが、みずから脚本を書いて「蟠桃会」と題した。この芝居を見た徳齢の報告では、西王母は「西遊記」におけるよりも活動的になつていたという（太田七郎・田中克己訳「西太后に侍して」昭和十七年、生活社刊）。まさしく芸術に社会が反映したのである。（北区岸町一ノ七　中込アパート）

民間伝承のバックナンバー

第十一巻二百円　第十二巻三百円　第十三巻五百円　第十四巻五百円　第十五巻六百円　第十六巻六百円　第十七巻百八十円　第十八巻二百四十円　第十九巻百二十円　第二十巻六百六十円　第二十一巻（学会手帖）二百円（送料とも）御注文は巻単位にお願いします。

陽春を迎えて

戸田謙介

☆春がやつてきます。生きとし生けるものの喜ぶ春です。

皆さまの御健康をお祈り申し上げます。

☆本誌の発行の停滞、何んとも申訳がありません。実は小生多年の不摂生がたたり、去る十月八日に社会保険中央総合病院にて、胃潰瘍の手術をうけて胃を三分の二ほど切りとりてました。経過良好でいつたんは退院したのですが、少し恢復を焦躁つたためか、まもなく血清肝炎となつて再入院、こんどはすつかりあきらめて療養に専念し、大晦日も正月も病院ですごして、今日に到つております。

☆しかし、諸国手の卓抜な技術、先輩知友の援助、社会施設の恩恵など、すべてが小生に倖いして、今回は生命を取りとめ得たばかりでなく、また少くとも五、六年は働ける自信を回復しつつありますから、どうぞ御休神ください。

☆療養生活でいろいろ反省、自己の無能もさることながら、民俗学の門前小僧となつて微力をいたして十六、七年、仄聞する事情はありとは云え、財団法人民俗学研究所は解散、日本民俗学会の本部が某出版社に仮寓の現状を、まことに残念に思う者の一人です。

☆また数年このかた、人類学（アンソロポロジイ）に興味を抱く者として、民俗学と民族学とが、たとえ、方法や対象に若干の相違はあつても、もつと深い提携のできぬのを遺憾に思つている者でもあるのです。

☆人類過去の事実から、将来への叡智を導き出そうとする大きな意味の歴史は、あらゆる関聯諸科学いや、人智を傾けつくしても、なおかつ、なかなか究め得ない態のものなのではありますまいか。

☆とまれ、能力の限界もわきまえず、あまりに外を見るに急で、本誌を改題して出発したのは、確かに道に迷つたのを悟りました。

☆やはり、民間伝承の名前と伝統を踏んまえ、歴史はもちろん、考古学や民族学その他、比較的に近縁の学問の、理解と好意とを持つて下さる諸先輩の援助のもとに、地道に進むよりほかはないと反省した次第です。

☆具体的には、諸先輩の賛同を得なければなりませんが、小生も今回の病気を転機として、よろずに心を入れかえ、本誌の経営に掉尾の努力を傾けてみたいと思つております。

☆ここに諸先輩をはじめ、誌友の諸兄姉へのお詫びをかねて、御挨拶を申し上げます。

六十の手習せむと今年より

これが本年初頭の小生の感懐です。すでに日は暮れて道ははるかなのにとお笑いください。

——∧。∨——

第一回　安井賞

本誌の表紙・カットをお願いしている春陽会々員田中岑氏は去る十二月十四日、海浜（四十号）で第一回の安井賞を獲得せられました。記して祝意を表します。

——∧・∨——

☆本号は学芸手帖となつて以来の編集子が十一月号として印刷所へ送り、すつかり組上つていたので三十六頁だけ新しくして出させてもらいました。

☆**東恩納寛惇**先生の「神酒・御花・御五水」が掲載できず申訳ありません。次号に載せさせて頂きます。

☆これからは地方の民俗資料的なものを成るべく多くと思つています。御投稿を歓迎します。

☆民俗学の中央連絡誌の役割も果すよう、掲載御紹介したいと存じますから、発行物、行事、ニュースなど御一報ください。

学芸手帖　第六号

昭和33年2月1日 印刷
昭和33年2月5日 発行　40円

編集発行人　民間伝承編集部　戸田謙介

印刷人　日本製版株式会社

発行所　六人社

東京都杉並区阿佐ケ谷1の870
振替口座 東京115444番
電話 荻窪(39)5994番

直接購読料　送料共　六カ月　二百四十円　一カ年　四百八十円

安岡正篤先生著

現代の不安と混乱を救う著者会心の歴史随想

興亡秘話

人間はいまだに興亡の悲喜劇をくりかえしている。その中にある濃まやかな人間味と、厳しい理法ほど、我々の胸を打つものはない。本書はまだほとんど世に知られていないわが戦国の哀史や、不遇の英雄、幕末の哲人、三国志に名高い孔明などを情理綿々として語り時に人間幽冥の好文学にわたるかと思えば、また中国の興亡を論じて、中共の根本的批判に及ぶ、まことに著者と一夕の宴を囲んで親しくお話を伺うような、不尽の感興を覚えさせる佳作七篇を収めた名著である。この書の中にある数々の理趣津々たる物語は、それこそ小説に、戯曲に、映画に、絶好の材料を提供するものである。

B六判上製美装本　定価　三三〇円

五百部限定瀟洒箱付特製ナンバー本　五〇〇円〒80

浅野晃先生著

岡倉天心

二月十五日発売

アジアの兄弟姉妹たちよ！大いなる苦悩がわれわれの父祖の地によこたわつている。と五十年前アジアの民族に自覚と使命とを訴えた岡倉天心の精神を天心研究の第一人者が語録年譜を加えて世に問う好箇の手引書

B6判上製　〒200 〒20

東京神田局区内美土代町六
振替東京58634・電(23)1825-6

明徳出版社

乞うご進呈
書店品切の節はとりよせ
直接注文の方に月刊杢耀

日本民俗学のために

記念論文集

合本　A5判

第四―六（三一八頁）第七―九（三一六頁）
第十総索引付（一六四頁）　頒価各二百円

第四輯　上代土豪の歴史…西岡虎之助　氏と氏神…岩崎敏夫　氏神に就いて…井上頼寿　近河湖北地方のおこない…三田村耕治

第五輯　上代文物観覚書…梅原末治　漁民と神幸…桜田勝徳　禁忌と呪術…桂井和雄　茶のある生活…椎橋好

第六輯　自然と神…肥後和男　耳塞餅…大藤時彦　八幡宮御頭文…西園寺富永　山の「こ」祭…林魁一

第七輯　民俗学と人文地理学…小寺廉吉　霜柱と氷柱…東条操　樹霊信仰の邦谷樹観…小林存　車田考…青木重孝

第八輯　新野の雪祭…小寺融吉　和泉の牛神と子供組…高谷重夫　羽黒山伏の集団組織…戸川安章

第九輯　山台戯…秋葉隆　サスヅクリ考…竹内芳太郎　産屋について…瀬川清子　おしら神祭文…今野円輔

第十輯　形態的に見た道祖神…武田久吉　古代人の他界観念…松本芳夫　松前年中行事…高倉新一郎…オシラサマの鈴の音…小井川潤次郎　大田植に於ける習俗とその祭礼…牛尾三千夫　顧末報告…橋浦泰雄

総索引　道祖神写真二十葉

民間伝承・六人社
杉並区阿佐ケ谷
電話(39)5994番
振替東京115444番

柳田国男編　A5判　四八八頁
海村生活の研究　価四五〇円　〒四八円

柳田国男著　B6判　二五六頁
国史と民俗学　価一二〇円　〒二四円

橋浦泰雄著　B6判　二五〇頁
民俗採訪　価一八〇円　〒二四円

瀬川清子著　B6判　二八八頁
きものの　価一八〇円　〒二四円